

## 藍より青く



あじさい 神戸市立森林植物園にて

日本人の色彩感覚や、好みとする色合いは、世界からみればちょっと異質な傾向にあると聞く。これは、日本国土の地理的な位置や条件、四季折々から受ける恵まれた自然環境に培われた中から生まれたもので、色に対する豊かな感性から育まれてきたものと思う。

このことは、日本の食の世界にも通じるようで、和食の中で醸し出される細やかな調理の美意識と、繊細にして整った和食の味覚には、日本人の心がしみ込んでいると言えそうだ。

砂漠に見る大胆な景色や、地中海の澄み切った景色の中では原色が主役となり、日本固有の“緑と湿潤”な風土から生まれた“和の色調”は望めないのかも知れない。

日本人の心の色として育ってきた“あかね色”や“からし色”“もえぎ色”“あさぎ色”…など和の伝統色は、

海外の環境や気質からはなかなか生まれてこないのだろう。

一方、藍や青色は、世界でもいろいろな分野で広く好まれている色らしく、デザイン界や衣の世界のみならず、医療における色彩効果は優等生のひとつだという。

わが国では、『藍より青く…』の故事ことわざにも出てくる青色は、日本の“匠の技”の伝承の世界に出てくる色で、先の“和の色あい”同様大切にしたい色のひとつである。

もしこの世に“色”というものが無く、モノトーンの世界だったらどのような地球に育っていただろう。想像しただけでも頭が白くなる。

この季節、紫陽花の青に人それぞれの思いを寄せながら、多様な日本の和の色合いを楽しみたい。

(ひしのみ 134号 写真と文 菅田 忠志)